

---

# 異常で普通で過負荷なひとたちの幼馴染

睡蒼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異常で普通で過負荷なひとたちの幼馴染

### 【コード】

N3031T

### 【作者名】

睡蒼

### 【あらすじ】

「めだかボックス」の二次創作の主人公達観て思った。皆さんもれなくチートすぎる。だったら主人公が普通だったらどうなるんだ？という考えで書いてみる。

## 第零箱「やっっちゃってくれましたたよあの天才馬鹿」

【世界は平凡か？未来は退屈か？現実<sup>ニ</sup>は適當か？安心しろ、それでも生きることは劇的だ！】

「……」

彼の現在の心境を簡素に顕すと『啞然』の一言に尽きた。

「（やったよ。やっっちゃってくれましたたよあの天才馬鹿！！）」  
彼のトレードマークである赤い帽子を深く被り直し、現在進行形で演説を行っている自身の幼馴染の黒神めだかからうなだれる様に首を垂らし視線を床へと落とす。

2

「（くそ！やっぱり昨日あそこで折れないでしつこく確認するべきだった…）」

黒神めだかは生徒会選挙において支持率98%という異常な<sup>アブノーマル</sup>数値を叩き出し、見事生徒会長の座を勝ち取った。

そして今日は初めて全校生徒の前で今後の指針等を説明する彼女に

とって大事な日だった。

彼は昨日の内にめだかのもとへと訪れていた。めだかが翌日に話す内容が不安だったためだ。

そんな彼にめだかは「心配せずに楽しみにしている！」と自信満々に切り捨てた。語弊が無いように言っておくが彼は不安なので、不安なので彼女に聞きに行っていた。

「（そうだよ…アイツが普通のことなんて言うはずがなかった）」ちらりと、顔は床に向けたままに、視線を周りの生徒達へ移動させる。

案の定生徒達もポカンとしていた。

【そんなわけで、本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業、恋愛、家庭、労働私生活に至るまで、悩みごとがあれば迷わず目安箱に投書するがよい！！】

そんな彼の考えも露知らず、めだか節炸裂で毅然と言い放った。

「（……寝よう）」

今の彼に出来る精一杯の手段は夢の中へダイブという現実逃避だった。

彼の名前は中澤 小並。今年度より箱庭学園高等学校に入学した極普通のピカピカ一年生だ。

第零箱「やっっちゃってくれましたよあの天才馬鹿」(後書き)

と言っわけで初投稿です。

デラどうなるか分かりませんが頑張ります。誤字ありましたら御一報ください。

## 箱庭学園生徒名簿

壱ノ1組 ナカザワ 中澤 コナミ 小並

血液型 A型

特技 封筒張り

資格 漢字検定準二級 英検二級

身長 168

体重 65

将来の夢 特に無し

容姿 中の上、ただしあまり特徴的ではない（と思っている）ため  
トレードマークとして赤い帽子を着用している。

概要 現生徒会長「黒神めだか」並びに壱ノ1所属「人吉善吉」の  
幼馴染。中学時代の成績、素行共に良好で無遅刻無欠席の優等生で  
あった。家族構成は三人で兄弟はいない。  
又彼は友好関係が広く深い（噂によればその人数は箱庭学園全生徒  
数に匹敵するほどである）。

尚彼はありとあらゆる面から見て普通イマムルと判断する。

箱庭学園生徒名簿（後書き）

「初めまして。一応この話の主人公やらしてもらってる中澤 小並です」

『堅いなお前。もっとフランクに出来ねえのかよ』

「無茶言つなよ。こんな人前に出たことねえから、緊張するなっつて方が無理だろ」

『かゝ本当に普通だな！まあいいや、お前のコンセプトが「究極の普通」だからな』

「…なんか釈然としないが、つつか俺の名前の由来って何だよ？」

『まあなんつつか地味に結構悩んだんだよね。めだかボックスってかなり特徴的な名前が多いからな。かといってさっきも言ったけどお前のコンセプトは「普通」だからな。特徴的な名前にならず尚且つそんなにいない名前を考えんのは僅かに苦労したな。』

「…結構ちゃんとしたこと言ってるけどさ」

『つつん？』

「俺の容姿と名前って遊○王のゲームの「タッグフォース」の主人公からパクってるよな」



『……………(汗)』

「小並だつてコナミだしな」

『良いんだよ！お前の唯一特徴の友好関係だつて元はそつちだからな！』

「見事な逆ギレだな」

『兎に角！！これからコイツが頑張りますので皆さんよろしく！』

「完璧に切り上げたな。まあいいや、皆さん暇だつたらよろしくな」

第壱箱「かわいいぞ善吉」(前書き)

ホントは原作の「話丸々書こうとしたけど時間がかかるアーンド長くなるのである程度で句切りしました。

## 第壱箱「かわいいぞ善吉」

・箱庭学園高等学校・

一学年が13組まであり、多種多様な部活が存在しているこの学校はマンモス校と呼ぶに相応しい生徒数を誇っていた。

勿論、それ程多くの人がいれば多くの話題が縦横無尽に飛び交う。

「ねえ聞いた？新しい生徒会長の噂」

「私たちと同じ入学したての一年のくせに冗談みたいにエルな奴なんだって」

「引くほど美人なんだけどやることなすこと滅茶苦茶に型破りでさ、教師もビビッて手エ出せないそうだけ」

…はずなのだが生徒たちの話はもっぱら一つ、否一人の人物、黒神めだかに集中していた。

そして話している生徒たちを見ながら嬉しそうな顔で少女が一人（少女というには幼すぎる容姿だがそこは置いておく）、ある二人のもとへ近寄る。

その二人は話には参加せず、一人は机に顔を伏せ、もう一人はその後ろの席で一心不乱に封筒貼りをしていた小並だ。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ。人前に立つのに慣れてるっつーかさ」

少女、不知火しらい 半袖はんそではぴょんと跳ねながら二人の間の横に立つと独り言のように話しかける。

「カツ！あれは人の前に立つのに慣れてんじやないよ。人の上に立つのに慣れてんだ！」さつきまで寝ていたはずの生徒が起き上がり不知火の方へ体を向ける。

箱庭学園の男子生徒の制服を身にまとい、目はキリツとして髪を短く切りそろえているこの生徒は間違いないく“女”生徒であり、名前は人吉ひとよし 善吉ぜんきちである。

パツと見は男子生徒に間違うかもしれないがよく見ると声は男子のそれと比較すればよくわかるし、身体も控えめながらも女性であることを主張する二つの突起が窺える。

「ま、確かにそれはそうだよな。後そんなことより俺は何で人吉の制服がそれなのが激しく気になるんだけど」

一通りの封筒貼りを終え、肩を叩きながら二人へ顔を向ける小並。

「カツ、良いんだよ俺は、ちゃんと学校から許可もらったし。それにスカートとか動きにくいし俺には似合わないからな…ってなんだよ小並？」

言いながら背もたれにもたれる善吉は小並の視線に気づく。小並は体の向きを完全に善吉に向け、上から下まで身体を見る。

そしてふつと目を閉じ思春期男子特有の想像力、否妄想力を駆使し善吉に女子の制服を着せる。

体を鍛えているためか綺麗な足をしている善吉、首元が出ているのでうっすら鎖骨が見える善吉。

そして何より、慣れないスカートを着ているために羞恥により頬を赤く染める善吉……………。

「…うん、普通にかなり可愛いぞ善吉」

「な…ななな！」

思う、ではなく断定する小並の発言に善吉は顔を真っ赤にさせた。

「あひゃひゃ 小並って本当に天然誑しだね。いつか刺されると思うよ」

「何でだよ！？怖エよ！！」

その様子を見て腹を抱えて笑う半袖に心底わからないといった顔をして突っ込む小並だった。

「で、人吉たちはどうすんの？」

さっきの雰囲気から落ち着いた不知火は二人に本題を切り出す。

「お嬢様が当選したってことは

、とーぜん人吉たちも生徒会に入るわけ？」

「カツ！そんなわけないだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるかっての、俺は絶対！生徒会には入らない！！」

理由に多少の違いはあるが生徒会に入らないという結論は一緒なので善吉に同の意を示そうとした小並だったがあることに気付いた、気づいてしまった。

席を立ち、不知火の方へ人差し指を向けポーズをとる善吉と全く同じポーズをしている生徒会長様を。

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ、そして小並よ貴様には話がある」

「!?ギヤアアアア…」

「ぐえ!?!じよおおおお…」

「…」

逃げようとした小並に音もなく近づき善吉の頭を、小並の頸を鷲掴みにして引きずって行ったためだかを見ていた不知火は数秒硬直した後机に突っ伏すした。

「あれ?中澤のやつどこ行ったんだ?」

眼鏡をかけた見た目温厚そうな日向という青年はノートを持って机の上でごろごろしている不知火に近づく。

「やあ日向君、小並達はね、さつきこわーい生徒会長さんに連れていかれちゃったんだよん」

「…そーいや人吉と中澤ってなんか選挙活動も手伝ってたみたいだけど、あの二人と例の新会長ってどういう関係なんだ?」

「あー、いわゆるひとつの幼馴染って奴ですよ。」

ま、あたしに言わせりゃただの腐れ縁なんだけどね」

面白そうに、けれどどこかつまらなさそうに不知火は日向にそう告げた。



第壱箱「かわいいぞ善吉」（後書き）

最初に一つ言っておく。封筒貼りに深い意味はない。

すみませんマジで意味無いです。ゲームのペルソナ4で封筒貼りのバイトがあっただんでそれを拝借したんです。

つうか書くペースがやべえ。単行本で二、三ページしか進んでない。

頑張っで次で一話分は終わらせたいです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3031t/>

---

異常で普通で過負荷なひとたちの幼馴染

2011年6月28日21時40分発行